

エコたま グリーン NEWS



多摩市民環境会議機関紙 第128号(通巻第188号)
2014年7月3日発行 発行人:清水武志朗 編集人:
井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山 3-9 東永山複
合施設 301 tel&fax 042-376-4572(事務局員は常駐
しておりません) e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp
URL http://ecomeetingtama.blog.ocn.ne.jp

瓜生小のホタル観賞会 60人もが楽しむ



市立瓜生小学校のイケイケキッズの子どもたちで、ホタル観賞の希望者が7月1日夜、保護者や10人ほどの当会議関係スタッフなどとホタル狩りを楽しんだ。そ

黄色い光跡を残して飛ぶゲンジボタルの総勢は60人ほどに達し、年々、希望者の数がふくらんでいる。

場所は永山6丁目から「よこやまの道」に上がり、そこからゆるゆると南側に下った川崎市の黒川地区の谷戸田と畑が続く前の森。尾根幹線道から徒歩で15分もかからないところだ。

一行は午後7時に尾根幹線の交差点前に集合。名前や人数などを確認したあと、さっそく出発。現地には7時15分~20分に到着。「近所に人家があるので騒がしくしない」「ホタルの方向に光を当てない」「ホタルをとったとしても帰り際に放す」などの注意を受けてから、ゲンジボタルの出現を待った。

7時35分ごろから1頭、2頭と舞う姿が見られるようになり、子どもたちから「あそこで光った！」の声。40分ごろから30頭前後の黄緑色の乱舞が漆黒の背景のなかで始まった。参加者のいる道路の上や頭のにまで飛ぶようになり、手を伸ばせば本当にとれそう。

こちらのグループが楽しんでいるあいだにも、自動車で観察しにきた住民も2組やってきて、同じように幻想的光景に興奮していた。

午後8時になり、集合。帰路についたのだが、尾根幹線道に近づくと絶え間ない自動車の走行音で、直前までの「幽玄の世界」からあっという間に現実の世界に引き戻されてしまった。なんとはいかないことなのか



現場に着き注意事項を聞く参加者・・・。(写真協力:田中千尋氏)

自然発生願ひ 国分寺で今年もホタル観賞会

第4回目となる国分寺の「姿見の池・ホタルの夕べ」

が6月29日、西国分寺にある姿見の池周辺で開催された。昨年は800人近い参観者が訪れ、集合地である公園の外の道路にもズラッと人が並ぶなど、国分寺の社会現象にもなりつつ箱のなかの光の点滅に大喜びあるほどの人気だ。



内容は、数人のホタルの飼育家が育てたヘイケボタル(1000匹以上)、ゲンジボタル(約100匹)を鑑賞用の箱に入れたものを池のほとりの2カ所に置き、それをボランティアの誘導員に案内された15~16人の市民が1グループとなって2カ所をめぐる鑑賞するというもの。今年は現場を直前まで雷雨が襲っていて、行事の中止も検討されたほどだったが、小降りになったので開催を決定。そんな悪条件でも約400人の来場者があり、この地のホタル人気の高さを示していた。



午後7時ごろには大勢の市民が並んだ

この催しは、生物多様性の象徴たるホタルを姿見の池に復活させることを目的にしている。すでに署名運動などにより市議会の建設環境委員会を通り、3月の市議会全体会議で「ホタルの生息する自然環境を整える」ことが可決された。地元の住民組織、泉山自治会でも「ホタル復活に対して全面協力する」ことが決められ、民のほうの意識はたいへん盛り上がっている。

実行委員会事務局の橋本正美さんによると、まず姿見の池の南側にある樹林地にヘイケボタルを自然発生させ、JR武蔵野線のトンネル内の湧水が流れる水路にはゲンジボタルを復活させたい、とのこと。そのためのホタルの幼虫も、えさの貝もどんどん増やしており、この7月から工程表に沿った再生の活動を本格化させる。また、公民館で「ホタルの養殖講座」も始める予定。



“ホッチ”なるゆるキャラも登場

生ごみリサイクル交流集会 in 多摩 2014(下)

● “生ごみは宝”で花いっぱいのもちづくり

戸田市環境クリーン推進課専門員・吉田義枝さん

NPO戸田EMピープルネット・池上幸子さん

戸田市では家庭から出た生ごみをリサイクルフラワーセンターで堆肥化し、障がい者と高齢者で花苗を栽培している。生ごみと花苗を交換することによって、燃やすごみを減量し、環境に負荷をかけない循環型社会の形成を図るとともに、花のもちづくりを推進している。

市民には生ごみバケツとEMボカシのセットを無料で貸し出し、家庭で出た生ごみ(約19ℓ)をバケツでEMボカシと混合してリサイクルフラワーセンターに持参すると花苗24鉢と交換してくれる。→吉田義枝さん
センターではこれを機械で堆肥化し、さらに利便性を高めるために堆肥をペレット





ト状に試作加工し、その商品化を目指して現在、成分分析するなど実証実験を重ねている。

家庭系生ごみペレットの使い方は、土を100に対しペレットを200生ごみ堆肥のペレット cc 使用する。プランターや鉢には大粒の赤玉土など底石を入れて水はけをよくする。ペレットと土をよくかき混ぜて、腐葉土も適量入れる。水は土の表面がしっかりと湿るまでかける。

余分な水分を吸収するため、1週間ほど熟成させるのもよいが、すぐ使いたい場合には苗と苗の間に適当な穴をあけ、その中に一握りのペレットを入れてから土をかけ、さらに水をかければ根元でよく吸収される。

●生ごみは土の力でリサイクル

国立市ごみ減量課清掃係主任 深谷夏人さん



深谷さんと右がキエーロ

家庭ごみ有料化未実施自治体の国立市では、各種のリサイクル方法を推進。生ごみ処理機「キエーロ」に続き、ミニ版も作成。使用実験は市役所玄関でアピールしている。

国立市のごみはおおよそ7割が可燃ごみ。循環型社会形成推進基本計画の第2期（平成23年～27年度）は平成22年度比「燃やすごみの20%減量」を目標に掲げた。その可燃ごみのうち、ほぼ3分の1が生ごみ。生ごみの堆肥化、リサイクル法などは多種あるものの、そのうちの「土地で分解する方法」に注目した。これなら土の量が増減しないし、臭い・虫・手間が少ない。

最初に目をつけたのが神奈川県葉山町生まれの「バクテリア de キエーロ」。平成23年度から先行して公民館で講習会を実施した。つぎに国立市は集合住宅が多いことから、畑や庭のない家庭向けに平成25年7月から「ベランダ de キエーロ」の実験を開始。

さらに一人でも多くの人に「土で生ごみを消す（分解すること）ができる」ということを実感してもらうために、ベランダ仕様の入門版、お試し版として「ミニ・キエーロ」を製作し、ミニ・キエーロのモニターを募集。これまでに40人以上が参加し、モニターとしての市民から情報を収集中。こうして循環型社会を一步進めている。

一ノ宮用水改修後の水生生物の調査報告(上)

報告者・西田一也氏（東京農工大学非常勤講師）

1. 目的

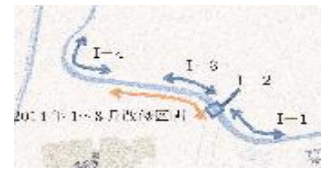
2014年4月26日（土）午前に多摩市一ノ宮用水において、1）当該用水に生息する水生生物相の把握、2）2014年1月～3月に行了われた水路改修が生き物と水路環境に与える影響の把握を目的に調査を行った。当該用水は日野市落川の程久保川の右岸から揚水機によって取水され、多摩市関戸で大栗川左岸に排水される延長約2kmの用排兼用の農業水路である。



2. 調査方法 (1) 水

生生物の採集

1) 2011～12年に改修された2面張り区間(1-1)。2014年に改修された区間約40mのうち下流側の2)橋下区間(1-2)と3)木杭護岸区間(1-3)。4) 2008年～09年に改修された3面張り区間(1-4)の計4カ所において、これまで東京農工大学で行われてきた多摩地域での他の農業水路の調査を参考に調査を行った。1-1、1-3、1-4では、調査区間20mの上下端をサデ網で仕切り、手網3名によって約30分間の水生生物の採集を行った。1-2では、手網またはサデ網3名程度により10分間程度の採集を行った。採集した生き物は種を同定し、魚類については全長・体長を記録したのち採集地点に放流した。



(2) 環境条件の測定

改修された区間において改修工法の種類等を記録し、写真撮影を行った。10時45分頃には水温と水質（pH、DO、EC）を1-3で測定した。1-1、1-3、1-4では、採集と合わせて5mおきに水路幅を4分割した3地点（計15地点）において水深と、6割水深の流速を測定した。また、水深・流速と同様の地点で泥やそれに混じる落葉落枝の堆積層を測定した。さらに河床の底質や植物の生育状況を記録した。橋の下である1-2では、区間の頂点4点の対角線の交点と、交点と頂点の間点（計5地点）において流速と、6割水深の流速および、泥・混落葉落枝の堆積層を測定した。

表1 調査区間の改修年月と改修工法

地点番号	改修年月日	改修工法
1-1	2011年12月1日～ 2012年3月12日	2面コンクリート張り護岸、礫が敷かれている。キショウブを植栽
1-2	2014年1月10日 ～3月28日	橋下を30cmほど掘り下げて深みを造成。深みの側面および底面はコンクリート
1-3	2014年1月10日 ～3月28日	左岸：木杭護岸、右岸：コンクリート護岸。礫が敷かれている
1-4	2008年12月9日～ 2009年3月13日	3面コンクリート護岸、礫が敷かれている

3. 調査結果と考察 (1) 改修後の水路の状況

1) 改修区間の工法 改修された区間(1-3)の右岸はコンクリート護岸。左岸は高さ約70cmの木杭護岸であった。木杭は隙間がほとんどなくほぼ直線状に配列されていたが、ごく一部にはセリなどが入り込み込んでおり、改修以前の植物帯が回復する可能性があると考えられた。右岸側は高さ140cmのコンクリート護岸であった。河床には粒径が2～3cm程度の礫が、深さ4～7cm一様に敷き詰められていた。1-1の2面コンクリ張り部分的に改修前に存在した石が置かれており、その裏側に若干の泥の堆積が認められた。



1-3の木杭護岸



(次号につづく)